



Title	丸紅商店染織美術研究会に関する研究：近代京都の図案教育に関する追跡調査Ⅰ
Author(s)	岡, 達也
Citation	デザイン理論. 2018, 72, p. 112-113
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70570
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

丸紅商店染織美術研究会に関する研究 — 近代京都の図案教育に関する追跡調査 I —

岡 達也 京都工芸繊維大学美術工芸資料館

本研究は、近代京都の図案教育研究の一環であり、図案に関する専門教育を受けた人物がその後産業界においてどのような位置を担っていたか、その一端を明らかにすることを目的としている。近代京都の図案専門教育機関としては、明治13年（1880）に創立された京都府画学校に端を発する京都市立美術工芸学校工芸図案科と明治35年に設立された京都高等工芸学校図案科があげられ、これらの二校は図案制作を職業とする人物を多数輩出している。2校の卒業生から、明治41年に京都高等工芸学校図案科を卒業した水木兵太郎（?-1939）が進んだ丸紅商店京都支店（現・京都丸紅株式会社）を事例として取り上げ、同社で設立された染織美術研究会とあかね会の設立から戦前期までの活動について検討する。水木は図案科を卒業後、明治44年から大正9年（1920）までのあいだ母校の京都高等工芸学校に教員として勤めるが、その後の昭和1年（1926）に株式会社丸紅商店大阪本社の意匠顧問として登用され、翌年に京都支店へと移った。

丸紅商店染織美術研究会は、昭和2年に同社内に設立された組織である。設立年の秋に第一回染織逸品会という名称で展覧会を開催し、その後昭和6年秋の第九回開催時に染織美術展覧会（以下、美展）に改称した。

美展の展示発表までの流れとしては、まず考案部と意匠部、そして現場の商品担当者を含めた議論によって各回の趣意を制作し、染織業者を中心とする研究会の会員に向けて発表する。この趣意に添って各染織業者は、考案部と意匠部が制作した図案を土台に、黒振

袖、色振袖、訪問服、お召、染着尺、丸帯などにする。つまり、図案や作品を一般から募集するという方法ではなく、京都支店と地元の作家や染織業者たちとの協力体制のもとに染織品をつくりあげる組織体制こそが染織美術研究会であったのである。

現在、京都丸紅株式会社に保管されている美展の図録から各回の趣意文を概観すると、およそ2年の周期で趣意の傾向が変化していくことが見てとれる。昭和5年の第六回から昭和14年の第三十回までの趣意の傾向を以下の4つに分類した。

I期：第六回～第十一回（昭和5年～昭和7年）伝統

II期：第十二回～第十六回（昭和8年～昭和9年）象徴化

III期：第十七回～第二十七回（昭和10年～昭和13年）簡素・単純化

IV期：第二十八回～第三十回（昭和14年）伝統への回帰

I期で参照可能な昭和6年（1931）秋に開催された第九回染織美術展覧会の特選には渥美新一郎の「訪問服・秋苑」が選出されている。渥美以外にも入選者として、手描き友禅師の中川華邨、岡島重助などの名前を見ることができる。

II期の第十二回から第十六回とIII期の第十七回から第二十七回の期間、趣意は象徴化から簡素・単純化へと変化している。また、この期間の第十九回から基調色が設定され、趣意本文もそれまでのものより詳細に記述するようになっている。II期の第十二回から第十六回は、図録が残されていないため、「象徴

化」として分類した期間の作品を見ることができないが、Ⅲ期の第十七回から第二十七回の「簡素・単純化」として分類した期間の出品作品からは、コントラストの強い配色の作品が多く出品されていることが分かる。また、ぼかしなどの諧調的な表現を用いた作品は減少し、モチーフを大きくし、大胆なレイアウトとはっきりとした色面とで構成していることが見て取れる。

Ⅳ期とした第二十八回から第三十回の期間は、「新東亜の建設」や「国家的指針」といったキーワードが趣意文中にも見ることができ、戦争という時代背景が反映されている。また、伝統的なモチーフを多用し、レイアウトも密度を高くする傾向がある。この要因として、第三十回は伝統模様の活用もテーマとして掲げられているという側面があり、時局を反映するような、松に鶴や立涌、瑞雲といった吉祥紋様や唐獅子、風神雷神といった力強さを象徴するようなモチーフが多用されていることも特徴としてあげられる。

丸紅商店は、三越の「逸品会」や高島屋の「百選会」など百貨店が小売店として顧客に直結するのに対して、製造卸業として「染織美術研究会」を創設した。このことは、百貨店が既製品を主軸として流行の創出と顧客の消費を促進するものとして位置づけられているのに対して、染織美術研究会は生産者側から発信するという立場のもと、流行を加味しながらも量産を前提とせず、高度な技術と美的価値を兼ね揃えた染織品の創出を命題とした機関として位置づけられる。

続いて、丸紅商店京都支店における染織研究のもうひとつの柱である「あかね会」についてみる。あかね会は染織美術研究会に先駆けて丸紅商店内で発足した同会の礎となる染織図案の研究会であり、竹内栖鳳、堂本印象、杉浦非水など日本全国の作家から図案の提供

を受けていた。現在、京都丸紅株式会社には、あかね会の図案として、昭和3年から昭和11年までの計13冊、546点が残されている。現存する図案は、紙に描かれたものと絹本のものとが混在しており、また、画題やテーマのようなものも年や巻ごとに統一性はなく、中にはスケッチや下絵に近い状態のものもある。こうした図案の状態からも、染織美術研究会が高度な技術によって徹底してきものを染織美術品へと昇華させることを目的としていたのに対して、あかね会は、アイデアの集積や図案の試作をおこなっていた会であることが読み取れる。

あかね会は、この頃各地で盛んに開催されていたような懸賞付きの図案公募形式による団体ではなく、会員制の図案研究会という体制であった。一企業内の研究組織として活動していたあかね会は、図案制作者が主催する研究団体でおこなっていた制作・出品、審査、展覧会というような形式ではなく、提供された図案を製品へと昇華させるための原案として社内に集積していた図案研究会として独自の活動を展開していた組織としてみることができる。

丸紅商店の事例を通して、産業界における水木の役割を考察すると、水木が実際に担っていたのは、美展における趣意の制作、基調色の選定とともに社内意匠部、考案部、そして図案制作者と染織作家との折衝であった。つまり、産業界における水木の役割とは、染織美術研究会としての意図を大きな流れとして、複数の制作者とともに作品としてつくりあげていくものであり、図案の制作そのものの技術はもとより、理論に基づいた制作を統括することのできる思考そのものであるといえる。